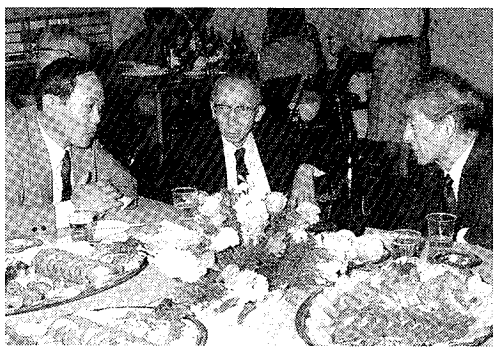
梧桐会総会開催!!

5月13日（日）母の日　PM1:00～　於大崎高校



▲ 思い出話に花が咲く ▼

昨年の総会風景

ご　案　内

日　時
5月13日（日）
12時30分
（受付開始）
1時～4時
会　費　500円
（新卒者は無料）
プログラム
会長の挨拶
学校長の挨拶
会計報告

今年も来ました梧桐会総会

今年もまた母の日（五月十三日）に梧桐会総会の日を開催します。この日を待ち望んでいた方、ごぶさたの方々、いつかは出席してみようと思ってるあなた、梧桐会では、そのようなあなたをお待ちしております。

昨年もまた、多数の方々のご出席をいただきました。恒例のカラオケ大会を行いましたが、またまたマイクの奪い合いとなる始末でした。また、二次会へと繰り出すグループも多く見受けられました。今年もぜひ〝「二次会」へ行くための集合場所〟としてもお使い（ご出席）下さい。

初夏の一日、ビール片手に、恩師・旧友と思い出話に花を咲かせましょう。

カラオケ大会
マイク奪い合いの張本人?です

梧桐会報

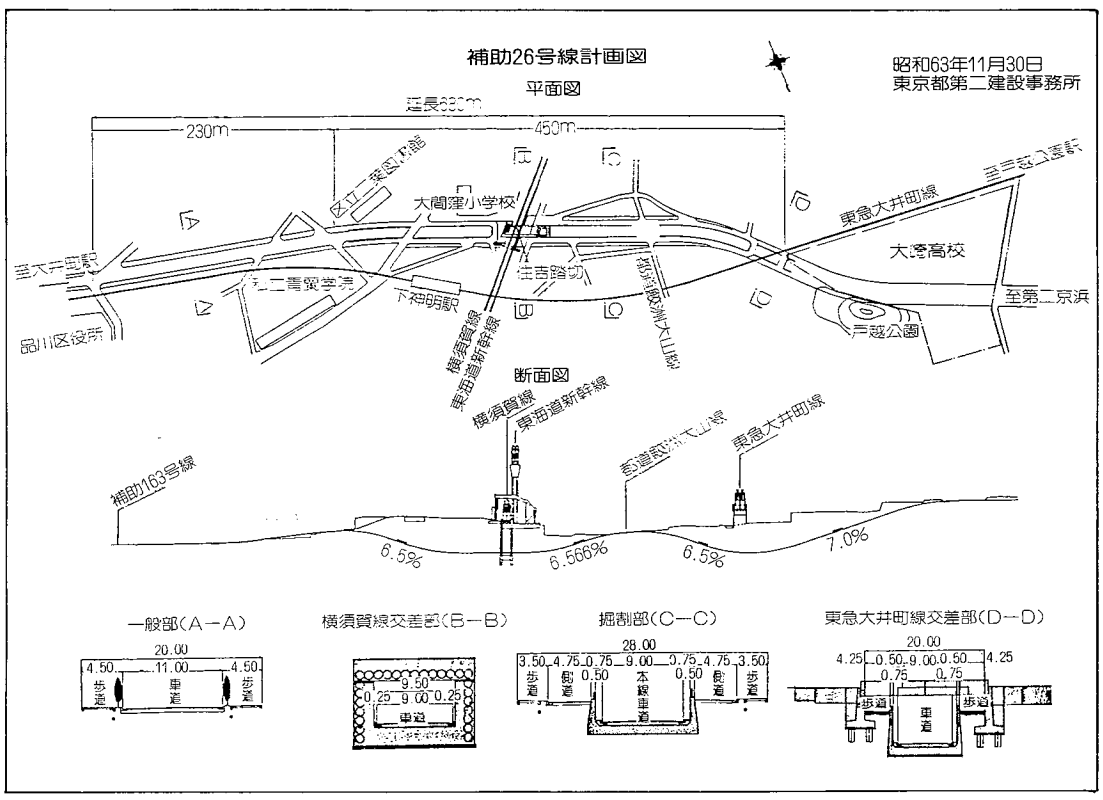
第37号

平成２年４月１日発行
発行所
梧桐会
東京都品川区豊町2-1-7
電話（786）３３５５～６
都立大崎高等学校内

編集人　渡部良彦
発行人　千葉治男
印刷所　日正印刷㈱

道路問題の経過と現状

道路対策委員　神山　久男



大崎高校の現敷地内を道路が通るという計画は、古くは昭和初期にまでさかのぼって沿道住民の希望により計画が決定されていました。しかし、対中国戦、対米英戦へと戦禍の拡大するなかで計画は中断され、当時、大崎駅近くにあった大崎高校の前身である東京都立品川実践女学校も空襲で焼失するなか、昭和二十年八月十五日の敗戦を迎えました。然るに、その翌二十一年四月、早くも改めて都市計画が決定され、この道路も都道補助26号線として、東大井を起点に板橋区氷川町までの路線が確定したわけです。そして戦後の学制改革のなか、新制高校へと生まれ変った大崎高校が、何カ所かの間借り生活をしながら現在地に移転してきたのが昭和二十五年でした。

戦後の混乱と窮乏のなか、道路計画などは遠い先の話であり、新しい日本の将来を担う子供たちを育てることが急務だった当時、とりあえず大崎高校を都市計画路線上に持ってきたものと思われますが、このへんの事情は不明ながら、とにかく大崎高校が道路計画が先にあったところに立つということに成ってしまったわけです。

それから四十年が経とうとしています。この間、主として区議選、都議選といった地域住民の利害・要求が表面化し、代議士候補者諸氏が地元への利益誘導を梃に当選を狙う時期に、たびたび26号線の早期開通を叫ぶ声が大きくなりました。

昭和五十四年には、大崎高校の通過問題を早く解決して道路を通せという請願が都議会に出され、その中では、学校の真下を完全に地下で通るトンネル案は拒否されていて、物理的に学校を分断しても道路を早く通せとあり、また署名代表者のなかに、品川区の小中学校のPTA会長の代表者も含まれているといったショックな内容のものでした。

そこで、これに対処するべく同年九月、PTA臨時総会を開き、「学校教育環境確保」の決議をし、一万二千余名の署名を得て関係方面及び都議会に請願書を提出しましたが、地元関係者の十分な理解が得られず、同年十二月の都議会で不採決となりました。

そこで五十五年、PTA理事会、同窓会役員代表、教職員代表から構成される「道路対策協議会」を設置し、改めて具体的に問題解決の道を研究し、本校敷地内通過部分については完全地下通過が本校の譲れぬ限界として、再び都議会に対し校庭内完全地下通路に設計変更されるように陳情書を提出しました。しかし、この陳情書は継続審議扱いとなり、道路計画の事業認可の方も戸越商店街の第一勧銀までとなって、問題は一時鎮静化しました。

しかし、六十一年から六十二年にかけて、再び地元住民より26号線の用地買収を早期に行なうよう陳情がなされ、これに対して、都建設局による大崎高校内完全地下通過のための拡幅用地買収の話が住民説明会に出されたものの、猛烈な反対にあい、合意は得られませんでした。そして六十三年の五月、第一勧銀から大崎高校正門前までの事業認可が降り、現在土地買収が予算に伴って進められているところです。

一方、下神明地区を中心とした既成道路部分のまったく無い区間についても、既に住民に対して説明会が持たれ、施行案（図参照）が提示されています。しかし、この地区は商業地域であり、地価への影響も大きく、計画が具体化されてくるまでにはまだ相当期間がかかるものと思われます。したがって、現在のところ大崎高校の敷地内については、26号線の最後の工事区間になってくる予定です。

こうして26号線は、じわじわと大崎に近づいているのですが、学校としましては、あくまでも大崎高校の教育環境を守るという立場を堅持しつつ、最終的には校舎の全面改築等により、道路を校内に飲み込んだ形で受け入れていかざるをえないのではないかと考えています。しかし、こうした選択の方向には、自ら教育環境の悪化に手を貸すことになるのではないかという危惧の念が消えず、道路に大崎が乗っ取られるのではないかという杞憂もまた強いものがあります。

したがって、今後早急に可能かつ望ましい校舎及び諸施設の設計プランとその配置を考慮し、関係各方面のご理解と協力を得るべく努力をしていく覚悟でおります。つきましては、今後とも同窓会会員の皆様の積極的なご支援とご協力を切にお願い申し上げ、大変おおまかではありますが経過のご報告といたします。

以上が学校側からの詳しい説明ですが、同窓会の会員の中にも以前からこの道路問題に携わってきた方がおります。品川区議会議員である松沢利行さん（38年度卒）からもこの問題についてお聞きしてみました。

松沢さんによると、

第二京浜国道～補助29号線（宮前通り）までは今年度中（平成2年度）に完成する予定です。第一勧銀～大崎高校までの区間は、今年度中に買収完了予定になっています。工事は、大崎高校前で一時止まり、同時に反対側（区役所～下神明～大崎高校）から進められてきます。いずれにしても、今後10年ぐらいでの完成をめざしているところです。大崎高校の通過問題は、今後の課題として残され、なお、話し合っていく事だと思います。

松沢利行さん

私は、大崎高校卒業生でもあり、「大崎高校道路対策協議会」の皆様（PTA理事、同窓会役員代表、教職員代表）と手を取り合って事の解決に当たっていきたいと思っています。「大崎高校の教育環境を守る」という立場に立っての運動となるわけですが、今後なお10年間という長い時間の中にあっては、PTA理事様また教職員の代表の方々には異動等が予想され、同窓会が中心にならざるをえないのではないかと思っているところです。

◇　◇

同窓会としても、会員の皆様方のご協力のもとに、この問題を前向きに支援していきたいと思っております

会員だより　特集・学校の先生

大学

大学教師二八年

斉藤　誠二（25年度卒）

大崎高校にお世話になりましたのは、戦争の足跡がそこここに残りわが国の全体がいまからではとても想像できないほど貧しかった、昭和二四年から二六年に掛けてでした。昼間は大崎にお世話になり、夜九時から夜中まで東京駅の前の郵便局でエレベーターを運転するという仕事をしておりました。

夜の仕事を続けたまま中央線国立にある大学に進み、大学院や司法試験などを終え、三七年の四月から吉祥寺にある成蹊大学の専任講師になりました。裁判官になる道もありましたが、その年の三月末に辞退いたしました。講師を三年、助教授を五年したあとで、四五年に法学部の教授になりました。五九年に請われていまいる筑波大学の教授に転出するまで、成蹊には二二年おりました。そのあいだに、四五年から二年余り、西ドイツにフンボルト財団の奨学金をもらい滞在したり、五二年から七年ほど弁護士の登録をしたりいたしました。筑波大学に移ってからも六年経ちました。この三月で二八年大学の教師をしたことになります。

このあいだには、法政をはじめとして、駒澤、独協、神奈川、横浜国大、日大などに講師にまいりましたり、慶應、早稲田、中央、明治、青山、関西大学などの（司法試験を受ける人たち向けの）法職講座にも講師としてお邪魔してきております。

今年は、筑波大学や駒澤大学などで毎週、刑法、刑事訴訟法、刑事政策や（医学部の学生向けに）医事法などの講義をしております。大学院まで含めて一週に一二、三時間の負担です。

これまでに、そこここの学校で顔をあわせた方の数は延べにすると数万人になります。いままで、教室では、いつも、最少限、①できるかぎり精一杯の情熱をこめて語ること、②受講者の立場にたって、できるかぎりわかり易くあきないように努力すること、③内容は自分の理解できるかぎりでアップ・ツー・デートでハイレベルをたもつ、などといったことを心掛けてまいりました。しかし、実際には失敗の連続でした。いまでも、いつも、その時間を終えると、これでよかったのかなという気持で一杯です。

このあいだに、文部省の科学研究費の出版助成金を四回もらい、四つの論文集をだしたりして、多少の（売れない）本もだしました。いちばん新しいものは、昨年「新訂版」をだした「脳死」や「臓器移植」などに関係するものです。

まえから「脳死」や「臓器移植」などについて発言してまいりましたので、昨年末にはいわゆる「脳死臨調」を作るための法案の審議の参考人として国会にいってまいりました。

大崎高校にお世話になってから、四〇年近い歳月が経ちました。おもえば、このあいだささやかな歩みをしてきたものです。これからもいい歳をして迷いながらささやかな歩みをしていきたいとおもっております。最後に、皆様方の層一層のご健勝とご多幸を哀心からお祈りしながら筆を擱きます。

西ドイツ・ケルン大学創立300年記念のシンポジウムに招待を受けて。旧知の西ドイツの代表的な刑法学者のロクシン教授の夫人と

大学

羽ばたけ後輩

野末　章（41年度卒）

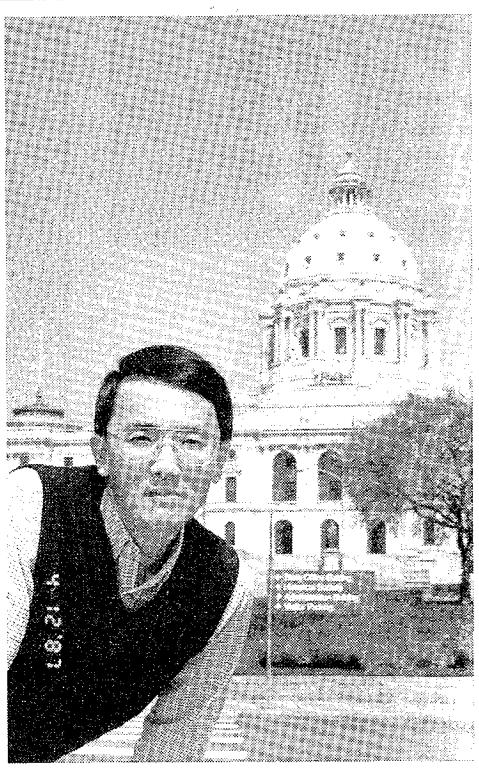
高校を卒業してから、大学、会社勤務、大学院博士課程、大学勤務と数年おきに全て異なる場所で過ごし、ようやく現在の職業で何かと落ち着いて生活をしております。現在は、上智大学理工学部機械工学科で材料強度学等の講義と研究を行っております。

体力、学力ともに平均以下の殆ど物を言わない劣等生であった高校時代の思い出としては、楽しいことよりも、むしろ苦しいことの方が多かったと思います。週三回の体育の授業における、初夏の炎天下のマラソンを鮮明に覚えています。深夜放送が好きで、睡眠不足の状態で炎天下でマラソンをしなければならず、非常に苦しい思いをしました。雨が降り、外での体育の授業が中止になると、本当にほっとした気持ちになりました。

卒業してから、一度も母校を訪問したことはなく、そんな不熱心な私にも春になり総会の案内が来ると、何故か懐かしくなり、大崎高校の卒業生であったことも再認識させられます。このような会報を通して、母校の卒業生の皆様にご挨拶ができることをうれしく思います。母校の先生方につきましては、大学で講義をする身になり、毎日行う授業のご苦労が良く分かるようになりました。

約二年前、米国のミネソタ大学で、Visiting Associate Professorとして約一年間研究する機会がありました。写真はその時ミネソタ州の議事堂前で撮影したものです。その留学の期間、研究以外に多くのことを感じました。米国の自由な中の厳しさ、ならびに日本では経済大国ともてはやされながら米国の多くの市民が日本については殆ど無知であり、無関心であるということなどが印象的でした。このような米国を含めた世界を相手に、母校の卒業生が活躍されることを切望しております。

最後に、上智大学において、母校の卒業生が全くいなくなったのは残念ですが、入学式で母校の卒業生と会える日が来ることを念願すると共に、母校の益々の発展を期待しております。



ミネソタ州の議事堂の前で

中学校

雑巾になった私

大鷹　良江（41年度卒）

都内の中学校に勤め始めて二十年目になります。校内暴力が話題になった頃、身も心も「ボロ雑巾」でした。そんな時にも、田口先生から梧桐会の仕事を頼まれるのであります。先生の熱意を知っています。断りきれずに、できるところまでやってみようということになってしまいました。手伝ってくれたみなさん、本当にありがとう。

そして今ではすっかり雑巾になってしまった私。それで生徒を光らせたり、学校をみんなのものにすることができたらいいのですが……。その雑巾にしみこんだ汚れをどうやってしぼり出すか、私のストレス解消法をお知らせしましょう。

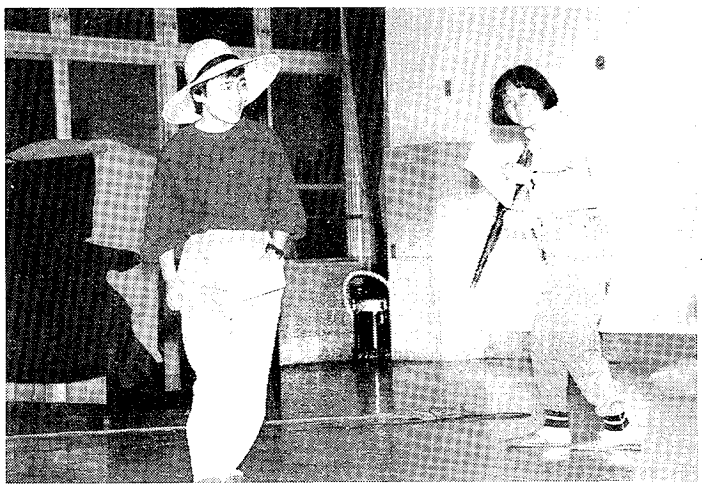
その一。夏休みに外国で「研修」をする。友だちとの個人旅行なので学校とは別の困難があるのですが、これは思い出になります。ゆったりとたくましく生きている人たちに触れて元気になれます。

その二。音楽を聞く。とくに民族音楽。アフリカ、中近東、インドなどの音楽に親しむと、邦楽もエスニックサウンドの一つになってしまうおもしろさがあります。からだ全体で聞いていると、旅行した国々を思い出します。

その三。歩く。花を見たり、町の様子を見たりして。好きなのは銀座。歩きやすいし、おもしろいものが見られるからです。

ある時、銀座で見た個展の主が、生物部先輩のM氏でした。いつもゆかいな仕かけのある、生物部がちらりと見えるアートです。私が教師になろうと思った時に、高校の生物を選んだのは、生物部の影響でしょう。都の試験に合格したものの、採用の見込みがないので、中学の理科教師になったのです。生物部の名物は景信山キャンプ。だめと言わずに引率してくださった先生方に、今お礼を言います。生物部は妙な集団でした。

そのほか、いろいろ手はありますが、いつも働きすぎないように自分なりのルールをつくって、守るようにしています。いざという時のために。



生徒の前で「白雪姫」の小人役

二十七年度卒実力者？の集い

牧野　隆男

高校を卒業して早くも三十七年が過ぎました。当時の美男美女も、社会の荒波を乗り切っていまや熟年の域に達し、中にはお爺さんお婆さんも誕生しております。

私達二十八年卒は、どことなく卒業時から家族的な雰囲気があり、毎年のように会合をもってまいりました。会の名称は「白鶴会」といって、正に鶴のように若々しく華麗に長生きする会合でもあります。最近になりそれぞれ忙しい為に、二年に一回の割合で開催しております。同好の有志は必ず、年一回十一月中旬に泊まりがけで温泉など巡り、お互いの親睦を深めております。

平成元年六月十八日に、卒業時担任の石川哲也先生、田中恂、特別に池田（旧姓北川）きよ先生をご招待して同期会を開催したところ、五十名強の出席で盛大な会になりました。田島先生は残念ながら不帰の人となり、喜早（松岡）先生は予定の所用の為欠席で、次回は必ず出席しますとの事でした。

先生方の出席で、一層賑々しく話題に花が咲き、当時の状景も思い起こしながら楽しく懇談しましたが、各先生ともほとんど変らず、お元気なことには驚きました。むしろ私達が、顔の皺にしろ頭髪にしろ、先生方に近づいているように思えました。

石川先生は、種々本を読まれひたすら勉学されており、田中先生は学校長を辞められてから囲碁を楽しまれ、時には海外ツアーなど行かれており、池田先生は国内外の旅行を楽しんでおられるとの事でした。

会は盛大なうちに二時間があっという間に過ぎて、再会を楽しみに散会しました。有志は二次会三次会で時を過ごしましたが、アルコールの濃度が濃くなると、男女というより中人になり、きわどい話も出てきて、〝恥らい〟がどこかへ飛んでいってしまうこともしばしばありました。

白鶴会を現在まで引っ張ってきた名幹事が大勢いる中で、男女一人ずつあげれば、武井嘉夫君と鈴木（今井）俊子さんであります。毎年の定例の大崎高校の梧桐会には、これもまた名幹事の広瀬（本間）英子さんが毎回出席しており、縦の連絡も密にしております。

なお、前回ご出席戴きました石川先生、田中先生、池田先生にはお忙しいところ有難うございました。この紙面をお借りして御礼申します。ご健勝で次回もよろしくお願いします。

都立大崎高校　昭和27年度卒同期会　H1.6.18　於 新宿東京大飯店

教壇に立つ同窓生達

小学校

「小学校」に漬かってしまった私

三好　治子（岩野）（25年度卒）

大崎高校。それは私にとって遠い遠い存在になってしまいましたが、青春時代の三年間を過ごした忘れがたい学校です。まだ、整備されていない校庭で、バレーボールを追っていた私は、突然降って湧いたような男女共学にすっかり心を乱され、ボールとたわむれることも忘れた日々であったことを覚えています。そこで出会った異性の級友から受けた影響は大きく、現在の仕事の中にも根をはっているのではないかと思うことがあります。

当時、経済的ゆとりのなかった私は、奨学金目当てに東京学芸大学に進みました。通訳の仕事にあこがれ教職につくことをためらっていましたのに、いつの間にかどっぷり「小学校」に漬かってしまいました。

小学校の子供達が毎日、新しい喜びや難題を運んできてくれたからでしょう。はたから見ればおかしなことかも知れませんが、十才そこそこの子供達と共に笑い、怒り、お互いがひどく人間っぽくなった時のうれしさは、言葉では表現できないものがあります。褒められるような事をしてこなかった分だけ偉そうに出来ない私ですが、子供達にむき出しの自分をさらけ出して付き合ってもらっています。教える、ということより、次々と新しい体験をさせてくれる子供達のお陰で、今もこの仕事に明け暮れています。

昨年夏、同じ大学に進んだ友人二人と出会いました。親友をあの世に送ってしまった心のあせりが彼女等との再会を急がせたのです。悔いのないようにあっておきましょうと……。専業主婦に納まっている二人ですが、年令を感じさせない溌剌とした様子でした。私の方は教員、主婦、母親に祖母役まで加わった何足かのわらじを履いての毎日。昔を思い出すことも少ないのですが、大崎高校の先生方や友達から得たものが生きることの底流に脈打っているように思います。

今、新築の匂いのした校舎や緑に囲まれた戸越公園を懐かしく思い出し、梧桐会のますくの御発展をお祈りしております。

（新宿区立落合第四小学校教諭）

小学校

イーハトーブの南の端にて

小島　正明（51年度卒）

大崎にいたときから私の夢は小学校の教師になることでした。今、その夢は岩手県で実現しています。

大崎を卒業して八年目のことでした。大学に入るのに一年、そして、出てから二年、教師への道はそうスムーズとは言えませんでした。浪人生活、玉川大の通信教育を受けながらのアルバイト生活と。そんな七年間に私は宮沢賢治に惹(ひ)かれるようになり、その故郷岩手県に引きつけられるようになりました。賢治を理解するには岩手に住まなければだめなのではないか。そんなふうに思い込むようになったのです。そして盛岡で行われた採用試験に挑戦。二回目にして、やっと思いを達成することができました。今、私は岩手県の一番南、藤沢町の大籠というところの小学校にいます。ここはその昔、隠れキリシタンが住み、処刑されたという所です。今でもその慰霊のため、教会が建てられています。学校はまさに自然の真中にあります。

朝、鶯の声に起こされ、丘の上の学校に行き、一クラス十五人の子供達と学び、運動する毎日です。小学校ですから国語・算数はもちろん体育・音楽・家庭科と一人で受け持つわけですが、中でも高校時代の仲間が聞いたら驚くだろうなと思われるのがクラブ指導です。全くの運動音痴の私がソフトボール部の監督、そして町の大会のための水泳・陸上の指導もするのです。最初は自身もなく遠慮がちな指導でしたが、先輩の先生に教えられ、子供達と汗を流すうちに楽しさも覚え、今ではユニホーム姿も様になるようになってきました。やはり若い教師は体で勝負というわけです。今年もそんなスポーツシーズンが始まります。今年ははじめて野球部を担当することになりました。素人だけれどまた若さと情熱でいきたいと思っています。

さて、岩手に来た理由の宮沢賢治ですが、今は学校のこと

岩手県・安比スキー場にて仲間の先生と左側白いウェアーが私です

平成元年度　教職員一同

最前列、向かって左から３番目が私です

〒一六一　新宿区下落合四　三一三一

幼稚園

夢だった〝幼稚園の先生〟

今野恵利子（佐野）（52年度卒）

暖冬のせいか、まだ三月も半ばだというのに、東京では桜のつぼみが色づき始めました。卒業式のシーズンを迎え、一つの〝別れ〟を味わうちょっとさびしい季節でもあります。

先日、ＪＲ大井町駅に行くことがあり、新しくなった品川公会堂を見て、大崎高校の卒業式のことを思い出しました。早いもので、もう十二年になります。三年間同じクラスだった友人、バレー部で共に泥まみれになった仲間とは、今でも交流があります。今思うと、毎日屋外のコートで練習をしていたなんて信じられません。しかし、いつ逢ってもその頃の苦しかったことが話題に出るのですから、不思議なものです。

卒業後、幼稚園教諭を目指し、子供の頃からの夢だった〝幼稚園の先生〟になりました。

最初の頃は、無我夢中で失敗ばかり。逆に子供たちに教えられるようなこともありました。泣きたい時も子供たちの笑顔に助けられてきました。キラキラした目で私を見つめる子供たちの顔、涙をこらえて叱ったこと、大失敗をして子供につらい思いをさせてしまったことなど、思い出は数え切れません。一生懸命練習して、一つの行事を成し遂げた時の満足気な顔を見ると、この仕事をしていてよかったとつくづく思いました。

四季の移り変りを肌で感じながら一年を過ごすと、必ず別れがありました。初めて卒園生を出した時、泣くまいと言い聞かせながら名前を呼びました。そして私にすがりついて泣く子供を抱いて一緒に涙を流しました。でも、その子供たちも中学生になり、毎年、年賀状が届きます。うれしいものですね。

三年前、七年間お世話になった幼稚園を退職致しました。それでもやはり子供とは離れられず、現在は、幼稚園に就園前の子供たちに関わる仕事をしております。

笑顔はもちろん、泣いても、おこっても子供たちの顔は最高です。そんな表情をいつまでも見つめて行きたいと思います。そしていつか自分の子供の顔をしっかり見つめる日が来るのを楽しみに――。

左側が私です。3年前に最後に持ったクラスが進級する時のものです

保育園

〝トラバーユ〟して保育園へ

佐藤佳代子（橋本）（36年度卒）

昨年、仕事の会合で戸越公園駅に降り立った。多分二十数年振りである。様変りした駅、商店街に目を見張りながら、でもなつかしかった。いつしか新しい街並街角の中に昔の面影を見つけ出そうと、懸命に右に左に目を転じながら歩いている自分に気がついた。

大崎高校を卒業し銀行に就職した私は、たった一年間で辞めてしまった。そしてＵターンして学生生活にもどり、保母資格を得て、二年後に保育園の保母として社会人の再スタートをきった。今で言う〝トラバーユ〟である。以来転職はしていない。

朝七時半から夕方六時まで、保育園の一日は長い。まだオムツをしている子から就学前の子ども達が終日園中を走りまわり、好きな遊びに夢中になり、仲間とけんかをし、すぐに仲直りをする。そして全身真っ黒になって遊び、お腹一ぱいおいしい給食を食べ、たっぷり昼寝をして夕方両親の迎えを待つ子ども達「子どもが好き」というだけで飛び込んだこの世界だったが、この二十五年間の中で私は子ども達や働く母親、最近では父親から「好き」だけではない心、楽しい、うれしい心。そればかりでなく、哀しい心、あわれな心、共感する心……沢山の感動する心を育ててもらった。

○登園時笑ってタンポポを差し出してくれる子

○おいしい給食に「ボク、口の中がムズムズしちゃった。」

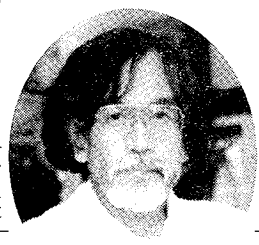
○「おじさんトリ年？　ボク、ヘビ年だからとべないんだ。」

こんな表現で私の心にせまってくる子ども達と、これからも共に心通わせて仕事をしていきたいと思っている。

朝の登園時、親との別れのさみしさよりも、保育園生活の楽しさの方が位置をしめているように。そして、夕方親のふところにもどった時に、そのほのかな暖か味を大事にし合える親子関係が育つようにと願いながら、園運営をしていきたいと思っている。

子ども達が作るカレーパーティーの時の写真です

大崎だより



現職員　平田知三郎

同窓のみなさん、そしてかって教壇に立たれた諸先生、お元気ですか。私もとうとう大崎で最後の年を迎えてしまいました。

二十三年前の春にはじめて校門をくぐった頃の、ヒマラヤ杉の並木に沿った石畳や、そのつき当たりの古ぼけた食堂のたたずまいなどがひどくたということなのですが、十年ほど前にこの欄でご紹介した、山で亡くなった小宮成美さんに逢える日が、その分だけ近くなったとも申せましょう。

思い出というものは妙なもので、最も早く取り壊されたあの南側の木造校舎の汲取りトイレ、校舎に近づいただけでそれとわかってしまうあのトイレ、用を足すとトポンと音がしてお釣りの来るあの恐怖のトイレ。私はついに二度とあのトイレに近づくことができませんでした。それがまたひどくなつかしい。

そしてまた、卒業式での各担任の、あの恐怖の五分間スピーチ。自分のときは「雨があがって風が吹く……」と中也を朗読したことしか覚えていませんが、美文調で格調高い田島先生の声や、アランの文体論を引用なさった堀江先生のお話などが耳に残っております。私はもう担任ではありえず、あのスピーチの復活を切に祈りたいと言ったら非難を受けましょうか。

ところで、何から何まで変わったと申しましたが、生徒の気質だけは本質的には変わらず、相変わらずのんびりゆかいにそしてまことに無用心にその日暮らしをするキリギリスのような生徒が多い。キリギリス族の一員たる私には、だから大崎が好きとも言えるのですが、標準服なるものが制定されて、この三月を以って「自由とする…各個人の良識と自主性によって自らの服装を選ぶ」という、あの誇り高い条文が生徒手帳から姿を消します。

ちょっと口惜しいけれど、「自由や権利というものは、あると思ってその行使を怠っていると、いつのまにかなくなってしまうものだ」という「日本の思想」の著者の言葉どおり、生徒自ら招いたことなのでしょうか。ただ、校服制定と同時に、時おり校服に赤いクツ下や校服に金色の髪といった、チンドンヤのようなアンバランスを眺めなければならなくなったのが、私にとっては情なく悲しい。

校門のヒマラヤ杉も校庭ぎわの柳も健在です。今年は春が早く、あのボロ食堂わきの桜もちらほら咲きはじめています。二十年たってやっと私も、テキストなしに大崎の校歌を歌えるようになりました。

「いざや共に　自由と知性の栄ある社会を築くこころよ　たゆみなし　自治のこころよ」　大崎らしくのんびりとした、味のある校歌です。どうかこののちも大崎が、早稲田の歌ではありませんが「集まり散じて人はかわれど　仰ぐは同じき理想のひかり」であってほしいと思っています。

ではみなさん、ごきげんよう。

職員だより

音楽と大崎高校の思い出

旧職員　保田　正

私が大崎高校の音楽科担当として奉職したのは昭和三十二年四月、同校を退職したのは五十七年三月です。この二十五年間を音楽の授業を通して回顧するとき、世想の流れを無視することのできないものがあります。

三十二年大崎高校へ赴任した当時、音楽室には、SPレコード（78回転）が数枚あった程度で、LP（33回転1/3）は一枚もなかったのです。日本ではLPレコードの実用化されたのは二十三年頃で、普及したのはそれより数年後のことですから無理もありません。

音楽科の僅かの予算よりLPレコードを毎年数枚づつそろえていったことを思い出します。三十年代の初期の頃は、まだ家庭にステレオがあまり普及しておらず、また、家庭にステレオがあっても、近所迷惑になるため、大きい音が出せない。それに反して音楽室で思う存分の大きい音響で名曲を鑑賞したときの、生徒の目の輝きは今でも忘れることは出来ません。特にベートーベンの交響曲第六番（田園）、ドボルザークの交響曲第九番（新世界より）のリクエストが多かったことを覚えています。

四十年代になると、市中にオルガン教室・ピアノ教室が目立つようになり、諸学校でも各種の器楽指導が盛んとなって参りました。私は生徒が大崎高校の卒業後も、自分で楽しめる楽器の指導を実施しようと思い立ち、オルガン（当時電子オルガンはない）を六台購入していただき、鍵盤楽器の指導に熱中しました。数年前、梧桐会の総会に出席したとき、卒業生から、当時オルガンを学んだ感激を忘れることが出来ないので、自分の娘にピアノを学ばせ、家族円満だと伺い胸があつくなりました。

五十年代になると、大崎高校にも強烈なエレキギターのビートによる、ロックサウンドの音楽が広まっていきました。学園祭の前には、ロック出演の希望者グループが続出、学校附近の家庭からも騒音苦情が多く、職員会議の議題にまでなったことがあります。

この生徒の情熱を音楽授業にとり入れようと思いつき、演奏形態自由のグループ演奏を実施しました。そのとき、グループ演奏の楽器の中からエレキギターの使用禁止を伝達したときの生徒からの不満の声にはまいりました。

五十七年大崎退職に引き続き、武蔵野音楽大学に継続して勤務、六十三年同大学を退職しました。現在私の生甲斐としている、昨年文部省より発表された、小・中・高の学習指導要領に準じた、「世界の名曲鑑賞ピアノ曲集」（仮称）の編集と、ある音楽の会より依頼されて、三、四十年代の女性四、五十人を中心とした合唱をJR蒲田駅の近所で指導しています。どれもこれも大崎在職中に蓄積した経験が、生きてくるので感謝しております。

私はこの三月で満七十五才、年が経てばたつ程大崎の頃が懐かしくなって参ります。五月の梧桐会総会には喜んで参加する予定です。一人でも多くの皆さんとお話しの出来ることを楽しみにしております。

教職員の転退

退職

西山　孝（学校長）
高橋時人（化学）
直井美恵子（家庭）
C. FARIS（英語）

転任

神山久男（世界史）　千歳丘高校
松島敏樹（保体）　忠生高校
小泉洋子（事務）　南高校
中島万里子（事務）　小山台高校

着任

掛川　久（学校長）　都教育庁
鈴木孝男（保体）　雪谷高校
岩崎房子（世界史）　赤坂高校
丹羽康雄（事務）　葛飾第二中学
小田桐仁（事務）　墨田工業高校
中村久子（用務）　港聚護学校

平成元年度卒業生 進路状況

（三月三十一日現在）

進学

四年制大学

亜細亜　二　桜美林　二
神奈川　一　関東学院　一
国士館　二　淑徳　一
女子美術　一　専修　三
創価　一　大東文化　二
拓殖　二　千葉工業　一
中央　一　鶴見　二
帝京　三　東海　二
東京家政　一　東京国際　二
東京理科　一　東洋　二
道都　一　独協　一
日本　一　法政　一
明治学院　一　明星　三
横浜商科　一　立正　一
New York 市大　一
四年制大学計四十四

短期大学

青葉学園　二　大妻女子　一
川口　一　川村　一
関東学院女子　四
共立女子　二　国際　二
産能　二　淑徳　三
十文字学園　一
昭和女子　一　女子美術　二
白梅学園　一　聖徳栄養　一
聖徳学園　一　洗足学園　一
田中千代学園　二
調布学園女子　五
鶴見大学女子　一
千葉経済　一　帝京　三
帝京女子　一　戸板女子　三
東京家政学院　一
東京家政大　四
東京工芸大女子　一
東京女学館　一
東京女子体育　三
東京電気大　一
都立医療技術　一
東京立正女子　一
東洋大　二　富士　三
東横学園女子　一
トキワ松学園女子　二
文化女子大　一
文京女子　一　文理情報　一
武蔵野　一
武蔵野女子大　三
短期大学計七十

専修・各種学校計一一七

就職

アサヒビール　いすず自動車
エトワール海渡
関西ペイント　京浜急行
関東電気保安協会
五反田製作所　資生堂販売
昭和大学　第一証券
テヅカ　天一
日産自動車　東調布信用金庫
日本コンピューター開発
ファッションナカマツ
ブリヂストン工業用品東京販売
ミツトヨ　三菱鉛筆
都ホテル
国家公務員　地方公務員

会計報告

		元年度予算	元年度決算	内容	2年度予算
収入	繰越金	213,097	213,097		150,027
	入会金	1,875,000	1,875,000	新会員入会費	1,875,000
	雑収入	220,000	188,177	総会、寄付、利息	200,000
	合計	2,308,097	2,276,274		2,225,027
支出	会報費	400,000	437,750	模擬店、アルバイト	450,000
	総会費	1,150,000	1,121,809	印刷、発送、編集	1,200,000
	幹事費	250,000	198,688	会合費、交通費、連絡費	150,000
	事務費	180,000	180,000	会館積立、名簿積立	180,000
	慶弔費	30,000	20,000	慶弔費	30,000
	名簿作製費	180,000	168,000	名簿作製事務、通信費	170,000
	予備費	118,097	0	予備費	45,027
	合計	2,308,097	2,126,247		2,225,027

役員氏名（卒年度）

会長　千葉　治男（41）
副会長　川村　治（38）
〃　原田　斉（44）
幹事長　加藤　昌明（60）
副幹事長　渡部　良彦（50）
書記　鈴木　一郎（62）
〃　品沢　修（61）
〃　安部　大悟（61）
会計　菅野真由美（61）
〃　戸沢　志乃（61）

新幹事（元年度卒）

A　冨所克成　前田恭子
B　金子智裕　中村英愛
C　西川弘一　佐藤弥生
D　山崎　崇　林　珠紀
E　荒川隆志　伊藤泉奈子
F　窄　正起　青木みどり
G　石井正人　岩崎弥栄子
H　石田　崇　須永　香

編集後記

◇例年にない早い桜の開花で、今年の会報も早まるかと思いましたが、こちらの方は今年も〝例年通り〟の発行となりました。今年も本業の〝異常な〟忙しさに追われたが、去年のようなつらい思いはしたくないと、夜遅くなってから少しでも会報の作業をするのがという日が続いた。眠い、眠い。

◇本号の職員だよりは、現職員平田知三郎先生と、旧職員保田正先生にお願いしました。平田先生も何度目かのご登場ですが、いよいよ今年度が最後ということだそうです。私は平田先生には習ったことがありませんが、あの〝ヒゲの先生〟のことは印象に残っております。十数年前のある日、放送で「……平田の所まで来て下さい。平田というのはヒゲをはやした男です」と聞いて、思わず笑ってしまいました（ゴメンナサイ）。また、保田先生といえば、たしか「春の足音」という曲だったと思います。一年の時、自己紹介ということで先生がレコードを聞かせてくれました。へたんぽぽの綿毛のように～中略～春だ春だ、春の足音だ～以下略、の〝春だ春だ〟の部分が今でもどこかから聞こえてくるような気がします。

◇会員だよりは、〝学校の先生〟の特集を組みました。大学から幼稚園・保育園まで、広く原稿を依頼しました。残念ながら高校の先生にはご執筆いただけませんでしたが、年度変りでお忙しいところを、皆さんありがとうございました。何人かにそれぞれの原稿に目を通してもらいましたが、さすが先生、文章が読みやすくおもしろいと好評でした。

◇26号線も、第二京浜から第一勧銀にかけての工事がかなり進んでおります。向う十年くらい大崎高校は現状のままのようですが、その頃には周辺はどれくらい変っているのでしょうか。

（なべちゃん）